

学会での発表・討論・交流を双方向で  
ダイナミックなものにするためのトライアルⅡ  
ーラウンドテーブルセッションの多様性の検討ー

岩井 梢<sup>1)</sup>、松岡奈保子<sup>1)</sup>、中村譲治<sup>1)</sup>、細井陽子<sup>2)</sup>、守山正樹<sup>3)</sup>

1) NPO 法人ウェルビーイング、2) 九州女子大学家政学部栄養学科

3) 福岡大学医学部公衆衛生学教室

### 1. 目的

ラウンドテーブルセッション (RT) は、演者と参加者がひとつのテーブルに座ってあるテーマに着いて話し合う仲間意識が生まれやすい発表形式であり、欧米では学会発表の一形式として定着している。

著者らは当学会でのRTの導入を試行するために、第13回日本健康教育学会のワークショップでRTを実施した。RTの実施にあたって、テーブル毎に様々な討論や交流が起こることを期待し、比較的緩やかな指針 (図1) のみを設定した。

RT当日は、テーマや参加人数、使用言語は異なる5つのRTが行われた (表1)。各RTで進め方、討議の内容、結果として得られるもの等が異なると考えられた。そこで、本発表ではテーマや立場の違いによってRTがどのように異なるのか、RTの多様性を検討したので報告する。

### 2. 方法

RT終了後に、参加者、演者、コーディネータにRTの内容や進め方をふりかえるための自記式のアンケート (図2) に回答してもらった。分析は以下の手順で進めた。

1. 回答をパソコンに入力
2. RT毎の参加者の「今回のRTに参加する前は」「今回のRTが終わってみると」「今回のRTで学んだこと」の3項目のコード化を分析
3. 演者とコーディネータのふりかえりの内容比較表の作成し、分析
4. プログラムに関するRTで、参加人数が大幅に異なる「中学生の問題行動／予防／心理教育的プログラム」と「運動／食習慣／ライフスタイル変更プログラム」の結果の比較

表1 2004年度RTのテーマと参加人数

|   | テーマ  | 参加人数 |
|---|--|------|
| 1 | 中学生の問題行動／予防／心理教育的プログラム                           | 8名   |
| 2 | 運動／食習慣／ライフスタイル変更プログラム                            | 18名  |
| 3 | Fitness Club Trial / Randomized Controlled Trial | 6名   |
| 4 | 子どもから家族／食情報発信／食に関する学習                            | 14名  |
| 5 | 禁煙指導から嫌煙教育／青少年／教育方法                              | 6名   |

|    |  |
|----|--|
| 1) | 一つのRTは一人の発表者と6～10名程度の参加者で構成する、           |
| 2) | まず発表を聞き、それに対し、その場で、発表者と参加者として質疑・討論・対話を行う |
| 3) | 対話を重視するため、スライド、OHP、マイクは使わない、             |
| 4) | 各RTには討論の補助として、ホワイトボードを用意する、              |
| 5) | 対話を円滑に進めるために、各RTにコーディネータを配置する。           |

図1 2004年度ワークショップRT指針

**ふりかえりシート** 氏名 \_\_\_\_\_ グループ \_\_\_\_\_

※ワークショップを通してのふりかえり、次の文章を完成する形で行ってください。

—私は、今回のラウンドテーブルに参加する前は、

—私は今回のラウンドテーブルを終わってみると、

—私が、今回のラウンドテーブルで学んだことは、

※来年の学食でもラウンドテーブルを実施するとして必要と感じることをお書きください。

名前について: \_\_\_\_\_

参加動機について: \_\_\_\_\_

期待性について: \_\_\_\_\_

参加意義について: \_\_\_\_\_

※その他、感想やコメントを自由にお書き下さい。

図2 2004年度RTふりかえりシート

### 3. 結果

分析結果は表2、表3に示す。開始前の思いは、1グループは期待以外にRTで発言することへの不安や心配を抱いているものがいたのが特徴的であった。2グループ

グループは多くの方がテーマへの関心を持って参加していた。終了後の思いや学びに関しては、各グループ様々な気づきや思いが出されていた。特に、特徴的なのは参加人数が多い2グループは、参加者と演者共に参加者同士の気づきや考えの多様性の気づきが見られたことである。

### 4. 考察

RTのテーマ、人数によって、参加者や演者の参加前の思いや終了後の思いや学びの内容は異なっていた。そのため、RTはいろいろな討論・交流を可能にする多様性を持った発表形式であることが示唆された。

(連絡先) 岩井 梢

〒810-0041 福岡市中央区大名 1-15-24

Well-being BLDG2F

TEL:092-771-5712 FAX:092-741-8037

E-mail: iwai@well-being.or.jp

表2 参加者ふりかえりシート分析結果

|   | 開始前の思い  | 終了後の思い  | 学びの内容   |
|---|---|---|---|
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマへの関心2</li> <li>・ 期待1</li> <li>・ 不安や心配2</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマに関する学びや気づき1</li> <li>・ 時間の不足1</li> <li>・ 議論への意欲1</li> <li>・ RTの企画に対する良い評価1</li> <li>・ 演者への配慮1</li> </ul>    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマに関する学び3</li> <li>・ RTの進行方法への示唆・提案2</li> <li>・ ディスカッションの楽しさ1</li> </ul>  |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマへの関心10</li> <li>・ 期待1</li> <li>・ RTへの関心1</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマに関する学びや気づき6</li> <li>・ 参加者同士の気づき2</li> <li>・ 時間の不足1</li> <li>・ 議論の不足1</li> <li>・ RTの進行方法への示唆・提案1</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ テーマに関する学び6</li> <li>・ 考えの多様性の気づき2</li> <li>・ RTの進行方法への示唆・提案2</li> <li>・ 継続した議論の必要性1</li> <li>・ 議論の方法に関する学び1</li> </ul> |

※数字は、回答数を示す。

表3 演者ふりかえりシート分析結果

|   | 事前の思い                             | 終了後の思い・感想  |
|---|-----------------------------------|--|
| 1 | 「どうなるのか予想できなかつた」ため、事前準備に時間を要している。 | 議論は活発に行われ、演者自身も新しい示唆を得ることができたと思っ<br>ているが、ディスカッションが中途半端になりがちだったと感じている。  |
| 2 | 発表前は「わくわくして眠れなかつた」と緊張していた。        | 「すがすがしい汗をかいた」と爽快感を感じている。また、共通のテーマに「同じ問題意識を持っている人達がたくさんいること」に気づき、継続した議論を重ね、現状をよくする努力(問題解決)の必要性を感じている。「またやりましょう」と次回への意欲も抱いている。 |

※「」は、回答した文章の原文である。